

福岡・大宰府条坊跡^{だざいふじょうぼう}

- 1 所在地 福岡県太宰府市朱雀
- 2 調査期間 第一六八次調査 一九九五年(平7) 六月～一九九六年一月
- 3 発掘機関 太宰府市教育委員会
- 4 調査担当者 井上信正・中島恒次郎・高橋 学
- 5 遺跡の種類 古代都市
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期?～平安時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(太宰府・甘木)

大宰府条坊跡は、古代、西海道を管轄した大宰府が置かれた大宰府政庁の南に広がる遺跡である。鏡山猛氏は、東西各一二坊、南北二三条の都市区画がなされ、その範囲は大宰府政庁を北の中心に据え、約二・六×二・四kmに及ぶとしている。これに基づき太宰府市教育委員会などが発掘調査を進めており、

東西南北に走る道路状遺構をふまえた新たな条坊復原案が提示されつつある。

今回木簡が出土した第一六八次調査区は大宰府条坊のほぼ中央、左郭一二条一～二坊(鏡山案)に位置する。ここは、東の丘陵上に古代寺院般若寺跡があり、「朱雀大路」を挟んだ北西には大宰府に左遷された菅原道真の滞在地として知られる榎社が近接するため、条坊内の一重要地点と目されている。今回の調査は市道の拡幅に伴うもので、長さ二〇〇m幅八mという、条坊を横断するような東西に細長い調査区が設けられた。

調査では、七世紀末から一二世紀にかけて幾度となく整地事業が繰り返されている様子が確認された。最も古い遺構は弥生時代後期と考えられるもので、当期の自然流路やドングリなどの堅果類を貯蔵したとみられる土坑が検出されている。この面は七世紀末とみられる整地層に覆われ、この整地の上に八世紀の遺構が展開している。この時期のものとして調査区の西端で当時の「朱雀大路」東側溝が検出されたほか、条坊内の建物の中では大型に属する掘立柱建物や溝(道路側溝か)などが検出されている。その後八世紀後半～末期に大規模な整地事業が行なわれ、この上に平安時代の遺構が展開している。この時期においても条坊内で最大級の掘立柱建物や井戸、柵列などが検出され、また東西南北に走る溝(道路側溝を含む)など、条坊に関連するとみられる遺構も検出されている。

遺物の出土量も多く、在地土器のほか畿内系土師器や肥後産須恵器などの各地の土器や国内外の陶磁器類をはじめ、和同開珎、石帯、漆器、木櫛、青銅鏡など多種に及んでいる。

今回の最大の成果は、奈良・平安時代を通じて、南北に走る溝や柵列、空地などがある間隔で検出されたことである。最近の大宰府条坊の発掘調査・研究で示された条坊復原案より推定すると、一坊内を東西にさらに二～三分割しているようである。これはすなわち居住空間を示すものと考えられ、これを一例として、今後条坊内における居住空間の復原が進められるものと期待される。

木簡が出土したのは、東西に走る道路状遺構の北に沿って掘削された一世紀末から一二世紀初頭頃の廃棄土坑（条一六八SK四七五）である。直径約3m深さ一・二五mの大型土坑で、底部には葉や雑木など、植物遺存体で構成される有機物の層（腐植土層）があり、その上は砂質系の土が堆積している。各層の堆積状況を見ると、腐植土層は、廃棄土坑として機能していた段階での開放状況下において、樹木の堆積とともに形成されたものと考えられ、その後土坑は、短期間のうちに自然堆積により埋没したものと解される。ここからは、在地土器のほか陶磁器類が出土し、木製品については、今回報告の二点の木簡のほかに曲物などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

二点とも、両面に墨書されている。肉眼による観察でも墨痕を鮮

明に確認でき、遺存状態は良好であるが、文字の釈読にまで至らなかった部分が多い。いずれも木札に落書きしたものとみられる。

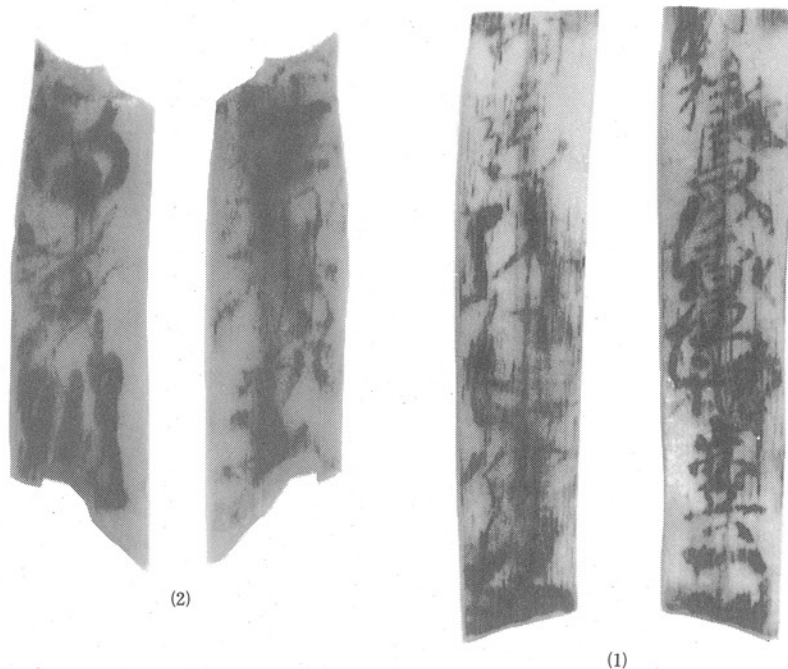
- (1)
- 桂馬香車 步兵 〔一カ〕
- 相 〔等カ〕
- (89) × 18 × 1.5 081
- (2)
- 〔月カ〕 〔冊カ〕
- 〔一カ〕
- (72) × (17) × 2 081

(1)は、土坑下部の腐植土層から出土した。柾目材で材質は不明（杉または檜か）。細筆、太筆により二～三回異なる運筆がほどこされている。表には将棋の駒名を記す。この木札は駒として再利用される予定だった可能性も考えられるが、直接それを窺わせる痕跡はみられない。また、裏の第二字目は「違」または「運」とみられる。なお、将棋に関連する平安時代後期の資料は、九州では初出とみられる。(2)については、土坑中位の茶灰色砂土層から出土した。板目材で材質は不明（杉または檜か）。当初は現況より幅広の板材であったようである。(1)と同様、細筆、太筆により二～三回異なった運筆がほどこされている。

なお、釈読については八木充氏、倉住靖彦氏、平川南氏、東野治

之氏、佐藤信氏ほか多数の方にご教示いただいた。

(井上信正・中島恒次郎)



『千葉県の歴史 資料編 古代』の刊行

これは一九九一年から始まった千葉県史編纂事業の最初の成果として刊行された、資料編二巻、別編一巻、自然誌一巻のうちの一卷である。房総三国に関わる文献史料を神話・伝承の分野から治承三年（一一七九）まで編年で収めるほか、木簡、正倉院調庸綾絶布墨書銘文、楊守敬本『将門記』（写真版）などを収載する。そのほか、別冊として「出土文字資料集成」があり、墨書土器や文字瓦などの出土文字資料を集成していることが特筆される。他県に例を見ないほど大量に出土している墨書土器を一覧できるようにしたことは大きな成果であろう。なお、市原市の市原条里制遺跡出土木簡（本誌二三号所収）は別冊ではなく本文に収録されている点を付言しておきたい。

財)千葉県史料研究財団編集、千葉県発行、一九九六年三月刊

A4判、本文六一二頁、図版九八頁、別冊四〇〇頁

頒価五四〇〇円、送料四六〇円

問い合わせ

千葉県史頒布会 TEL 〇四三—二二七—七五五一